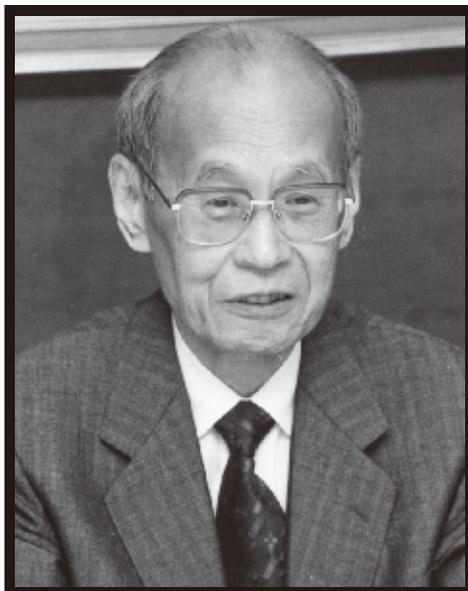


追悼



故 越川昭三 先生 略歴

(昭和3年5月29日生—平成26年7月2日没)

<職歴>

昭和27年3月 東京大学医学部卒業, インターン研修
昭和28年4月 東京大学第一内科入局
昭和39年4月 東京医科歯科大学第2内科講師
昭和48年4月 東京医科歯科大学第2内科助教授
昭和51年9月 昭和大学藤が丘病院内科(腎臓)教授
平成6年3月 定年退職, 客員教授
平成18年12月 昭和大学名誉教授

<主な著書・編書>

輸液 中外医学社 1970
腎臓の病気 中外医学社 1974
人工臓器資料集成 ライフサイエンス社 1976
外来における輸液の実際 金原出版 1977
症例による輸液の実際 中外医学社 1980
内科 Q and A 腎臓 金原出版 1981
症例による輸液の実際 中外医学社 1983
水電解質代謝の基礎と臨床 真興交易 1983
水電解質代謝の臨床(監訳) 中外医学社 1984
むくみ メジカルビュー社 1984
ナースの内科学 中外医学社 1986
ケーススタディ検査値の診断プロセス 中外医学社 1989
透析療法における合併症 医薬ジャーナル 1994
透析療法小辞典 永井書店 1994

輸液ハンドブック 中外医学社 1994

症例に学ぶ透析療法 中外医学社 2007, その他多数

<学会活動>

腎臓・透析分野の主要学会などでの活動

●日本腎臓学会

昭和41年9月 学術評議員
昭和62年5月 第17回東部学術大会・大会長
平成6年4月 功労会員
平成11年4月 名誉会員

●日本透析療法学会・日本透析医学会

昭和60年7月 評議員, 理事
平成2年7月 第35回学術集会・総会会長
平成4年7月 理事長
平成5年11月 日本透析医学会初代理事長
平成6年7月 名誉会員

この間, 総務委員会, 会誌編集委員会, 評議員選出委員会, 倫理委員会などの委員・委員長を歴任

●日本腎臓財団

昭和47年11月 評議員
昭和49年4月 雑誌「腎不全を生きる」編集同人
平成15年度 日本腎臓財団賞 受賞

恩師・越川昭三先生を偲んで

自治医科大学名誉教授・元日本腎臓学会理事長・日本腎臓財団理事長

浅野 泰

日本腎臓学会名誉会員・昭和大学名誉教授の越川昭三先生は平成 26 年 7 月 2 日にご逝去されました。享年 86 歳でした。当学会の発展に多大な貢献をなされた巨星が落ち、大変残念に思っております。

しばらく前より聴力が低下され、元々シャイなお人柄でもあった先生は、学会も含めていろいろな会合に出席なさらなくなり、最後にお目にかかったのは 5, 6 年前の越三会であったと思われます。それ以前の 2, 3 回の会合では聴力低下をととてもお気になさっていたご様子でした。

越三会とは、越川先生に東京医科歯科大学でご指導を受けた弟子たちが年に 1 回、越川先生を囲んで集う会であり、先生が昭和大学に移られて間もなく始まったと思われまます。学年的には丸茂文昭先生(昭和 37 年卒)から佐々木成先生(49 年卒、前東京医科歯科大学教授)など 51 年卒までで、40 名ほどが会員で、毎年 30 名近くが集まっておりました。越三会の名は、越川昭三先生のお名前から発生しております。われわれは、親しみも込めて日常的に先生のことを「こしさん」と呼ばせていただきましたが、この会は「えつぎんかい」と呼ばれました。名付け親は新潟出身の故・中川成之輔先生で田中角栄元首相の越山会をもじって命名したものでした。いずれにしろ、このような会が長年にわたって毎年開催されたことは、いかに先生が弟子たちに慕われていたかの現われかと思われまます。

越川先生は、昭和 27 年 3 月に東京大学医学部をご卒業、インターン研修を終えられたのち第一内科に入局されました。その頃のことは、日本腎臓財団賞を受賞されたとき(平成 15 年度)の座談会で話されており、その記録も参考にさせていただきます。

先生は学生時代から第一内科に入局することを決められておられたそうで、その理由は、当時の柿沼教授の臨床講義が最も素晴らしかったからだと言われております。越川先生の講義は素晴らしく、難解な腎臓学の講義をわかりやすく話される原点が此処にあったのだと知ることができました。不肖の弟子である筆者には、最後まで到達できなかったことです。インターン終了後は第一内科の吉利(後の第一内科教授)研究室に入られました。その理由も、当時では最先端の水電解質に関する研究装置があったこと、優秀な先輩が多くおられたこと、心臓グループもあってその方面でも最先端の生理学的研究がなされていたことをあげられておられます。〔たしかに東京医科歯科大学病院での回診時の心電図読解力は理論的で素晴らしいものでした。筆者と同期の笹岡拓男君(後の横須賀共催病院内科部長)はそれに傾倒し、心電図を基によく議論していました。〕

研究室では利尿薬の研究をされていた前田貞亮先生(今も学会でお会いできます)の下につかれ、当時、次々に開発され出した利尿薬の研究をストップフロー法を用いてなさったそうです。クロロサイアザイドと水銀利尿剤(今は使われませんが)とダイアモックスの作用を比較した研究で、この成果は、吉利先生が香港のインターナショナル・カンファランスで発表されました(昭和 33 年)。そのとき、会議に日本より参加し講演された先生方が相談されて日本腎臓学会を設立し、第一回総会が昭和 34 年 7 月に開かれたそうです。このように、越川先生の研究が日本腎臓学会発足のきっかけにもなったわけですが、さらにこれらの研究内容は、「尿細管利尿剤の作用機序」として、日本腎臓学会誌第 1 巻第 1 号に最初の原著論文として掲載されました。このように、先生は日本腎臓学会発足と深い関係にあり、また学会誌が発展するきっかけ

にもなったわけです。

先生はその後、昭和39年に東京医科歯科大学第2内科に講師として赴任されました。第2内科は霞ヶ浦の分院で結核の治療(大淵重敬教授)を主に行っていたのですが、東京に進出して第2内科となり、新たに幾つかの研究グループが作られました。その一つとして、丸茂文昭先生(後の北里大学助教授、東京医科歯科大学教授)が中心となって腎臓研究室を立ち上げることとなり、またそのリーダーとして越川先生に白羽の矢が立ったのでした。しかし何の機器もなく、全くのゼロからの開始で大変苦勞をされたことと思われます。筆者が入局したとき(昭和41年)には、腎グループはちょうど10名となり、それぞれ2,3名の小単位で研究に取り組んでおりました。イヌの実験では、自らテクニックを伝授されていたようでしたが、時間がおありのときは常に書物を読まれておりました。ときには筆者の実験場にふらりとお見えになり、こういう論文を読んだけどどうなっているのかい、と即答できない質問をされ、冷や汗をかいたものでした。しかし、決して威圧的になられることもなく、いつもにこやかに、最終的には部下の意見を取り入れてくださり、当時の縦社会では考えられないほど自由に研究をさせてくださいました。多くの弟子たちが大きく羽ばたくことができた原点はこの「自由」にあったと、今更ながら思っております。

何もない東京医科歯科大学に移られて、ちょうど慢性維持透析療法が始まった頃のことでもあり、人工腎臓・透析の研究についてはどこの大学もゼロの状態、同じスタートラインに立てる有利さがあり、中川成之輔先生を中心にこの研究を進めたと述懐されていますが、これも先生の先を見越す洞察力の賜物と思われまます。

その後、昭和51年に昭和大学(藤が丘)に移られましたが、このときは北岡建樹先生と秋澤忠男先生(後の昭和大学教授・透析医学会理事長)と一緒に参画され、瞬く間に大きな組織となり、研究成果にも一層の磨きがかかりました。こうして透析器や透析関連薬剤(透析液や補充液、抗凝固薬、合併症治療薬など)や利尿薬の開発に大変貢献されましたことは周知の事実であります。また、日本透析療法学会から日本透析医学会への移行期には、両方の学会の理事長を務められ、法人化を成し遂げられました。

筆者が自治医科大学循環器内科で腎臓・透析を担当することになった以降には、それまで以上に外から多大なご指導・ご援助をいただくこととなりました。研究費に困っているだろうと、数々の治験のご紹介や研究会に入れてくださり、また業績を伸ばすようにと、書籍や雑誌の執筆や雑誌の編集業務の後任にも推挙くださいました。筆者の就任時はまさに先生が東京医科歯科大学に赴任されたときと同じ年頃で、先生の組織運営を目の当たりにさせていただいたことが大変役に立ちました。その後、自治医科大学腎臓内科が独立し、筆者が初代教授に就任することになったのも、先生の支えなしには実現しなかったと思われまます。すべてを通じて支えてくださった恩師に、ゆっくり御礼申し上げる機会もなく他界されてしまったことは、返す返す残念でなりません。

越川門下生で、両大学から15名に余る教授が排出され、さらに多くの者が基幹病院の病院長、部長など幹部職員として働いており、今では孫弟子たちが活躍し出しております。先生は、どこでも「弟子に恵まれた」とおっしゃっていましたが、実際は時代の先端を走り、自由な雰囲気の中、あるときは厳しく、あるときはやさしく導かれる先生を慕って多くの人が集まり、薫陶を受け、それぞれが羽ばたいて行ったのでした。

謹んで御礼申し上げ、ご冥福をお祈り申し上げます。有り難うございました。